

仙台市立木町通小学校 いじめ防止基本方針

策定日 平成26年2月
(最終改定 令和元年9月1日)

はじめに

いじめは、児童の教育を受ける権利や、愛され、保護され、心身の健やかな成長を保障されるという権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その身体に重大な危険を生じさせるおそれがある決して許されない行為である。

仙台市立木町通小学校（以下「本校」という。）におけるいじめの防止等（いじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの対処をいう。）のための対策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針を、いじめ防止対策推進法（平成25年法律第71号。以下「法」という。）第13条、及び仙台市いじめの防止等に関する条例（平成31年仙台市条例第28号。以下「条例」という。）第11条の規定に基づき、「仙台市立木町通小学校いじめ防止基本方針」（以下「学校いじめ防止基本方針」という。）としてまとめ、ここに策定する。

本校は、保護者や地域住民等との連携の下、子供の尊厳を脅かすいじめが、いつでも、どこでも、いずれの子供にも起こり得るものであるとの共通の理解をもって真摯に向き合い、いじめの防止等の取組を変化する時代を背景に、不断の見直しを行いながら着実に推進していく。

I 基本的な考え方

1 いじめの防止等の対策に関する基本理念

法第3条に規定されている基本理念は次のとおりである。

- いじめの防止等のための対策は、いじめが全ての児童等に関係する問題であることに鑑み、児童等が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わずいじめが行われなくなることを旨として行われなければならない。
- いじめの防止等のための対策は、全ての児童等がいじめを行わず、及び他の児童等に対して行われるいじめを認識しながらこれを放置することがないようにするため、いじめが児童等の心身に及ぼす影響その他のいじめの問題に関する児童等の理解を深めることを旨として行われなければならない。

○いじめの防止等のための対策は、いじめを受けた児童等の生命及び心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、国、地方公共団体、学校、地域住民、家庭その他の関係者の連携の下、いじめの問題を克服することを目指して行われなければならない。

条例第3条では、法第3条に規定する基本理念のほか、次に掲げるものを基本理念として行われなければならないとしている。

○いじめの防止等のための対策は、学校が、全ての児童生徒にとって安心でき、かつ、自己有用感及び自己肯定感を高める楽しい学びの場であるべきことを旨として、行われなければならない。

○いじめの防止等のための対策は、全ての児童生徒がいじめを受ける側にも行う側にもなり得るとの認識の下、いじめを早期に発見し、及び適切かつ迅速に対処すべきことを旨として、行われなければならない。

○いじめの防止等のための対策は、暴力や暴言が児童生徒の心身に深刻な影響を及ぼすことを考慮、児童生徒が健やかに育つことのできる環境の実現を目指して、行われなければならない。

○いじめの防止等のための対策は、いじめの要因を把握し、いじめの再発を防止することを旨として、行われなければならない。

○いじめの防止等のための対策は、地域における交流が児童生徒の自己有用感及び自己肯定感を高めることに資することに鑑み、地域における活動及び行事がいじめの防止等に資するとの認識に立って、取り組まれるものとする。

本校は、この基本理念の下、かけがえのない子供たちがいじめによって悩み、苦しむことなく、元気で明るく学び、健やかに成長していくことができるよう、いじめをなくすための対策に教職員一丸となって、強い決意で取り組んでいく。

2 市立学校及び市立学校の教職員の責務

仙台市では、条例第7条により、市立学校及び市立学校の教職員の責務を次のとおりに定めている。本校は、その責務を十分認識の上、いじめをなくすための対策に総力を挙げて取り組むものとする。

市立学校及び市立学校の教職員は、基本理念にのっとり、当該市立学校に在籍する児童生徒の保護者及び地域住民並びに関係機関との連携を図りつつ、当該市立学校全体でいじめの防止及び早期発見に取り組むとともに、当該市立学校に在籍する児童生徒がいじめを行い、又は受けていると思われるときは、適切かつ迅速にこれに対処する責務を有する。

3 いじめの定義等

(1) いじめの定義

いじめの定義は、条例第2条第1号により、法第2条第1項と同様に次のとおり定めている。本校はこの定義に基づき適切に対処していくものとする。

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、いじめを受けた児童の立場に立つことが重要である。この際、いじめには、多様な態様があることに鑑み、法の対象となるいじめに該当するか否かを判断するに当たり、行為が起こったときのいじめを受けた児童本人や周辺の状況等を客観的に確認しながらも、被害児童本人がそれを否定する場合や本人が気づかない場合等が多々あることを踏まえ、被害児童の表情や様子をきめ細かく観察するなど、「心身の苦痛を感じているもの」との要件が限定して解釈されることのないよう努めることが必要である。

「一定の人的関係」とは、学校の内外を問わず、同じ学校・学級の児童や、塾やスポーツクラブ等、当該児童が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童と何らかの人的関係を指す。

また、「物理的な影響」とは、身体的な影響のほか、金品をたかられたり、隠されたり、嫌なことを無理矢理させられたりすることなどを意味する。

けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断するものとする。

なお、例えばインターネット上で悪口を書かれた児童がいたが、当該児童がそのことを知らずにいるような場合など、行為の対象となる児童本人が心身の苦痛を感じるに至っていないケースについても、加害行為を行った児童に対する指導等については、法の趣旨を踏まえた適切な対応が必要である。

加えて、いじめを受けた児童の立場に立って、いじめに当たると判断した場合にも、その全てが厳しい指導を要する場合であるとは限らない。例えば、好意から行った行為が意図せずに相手側の児童に心身の苦痛を感じさせてしまったような場合、軽い言葉で相手を傷付けたが、すぐに加害者が謝罪し、教員の指導によらずして良好な関係を再び築くことができた場合等においては、学校は「いじめ」という言葉を使わず指導するなど、柔軟な対応による対処も可能である。ただし、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当するため、事案を条例第14条及び法第22条の学校いじめ防止等対策委員会へ情報共有することは必要となる。

いじめの認知は、特定の教職員のみによることなく、条例第14条及び法第22条の「学校いじめ防止等対策委員会」を活用して行う。

【具体的ないじめの態様の例】

- 冷やかしやからかい，悪口や脅し文句，嫌なことを言われる
- 仲間はずれ，集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり，遊ぶふりをして叩かれたり，蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり，叩かれたり，蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 金品を隠されたり，盗まれたり，壊されたり，捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと，危険なことをされたり，させられたりする
- パソコンや携帯電話等で，誹謗中傷等の嫌なことをされる など

「いじめ」の中には，犯罪行為に当たるものや，児童の生命，身体又は財産に重大な被害が生じる恐れから，直ちに警察に通報することが必要なものもある。

このような場合には，教育的な配慮や被害者の意向にも配慮の上で，警察と連携した対応を図ることが重要である。

(2) いじめの理解

いじめは，どの子供にも，どの学校でも，起こり得るものである。とりわけ，嫌がらせやいじわる等の「暴力を伴わないいじめ」は，多くの児童が入れ替わりながら被害者にも加害者にもなり得る。ま，「暴力を伴わないいじめ」であっても，何度も繰り返されたり多くの者から集中的に行われたりすることで，「暴力を伴ういじめ」とともに，生命又は身体に重大な危険を生じさせるものであることを理解して対応に当たる。

また，「友人関係」における双方の力関係のバランスが崩れると，「遊び・ふざけ」が「いじめ」へと変わることにも注意する必要がある。

さらには，いじめの加害・被害という二者関係だけでなく，社会全体にいじめを許容しない雰囲気形成されるようにすることが大切である。具体的には，学級や部活動等の所属集団の構造上の問題（例えば仲間意識に起因する排他性，集団内での人間関係の序列化など）を理解して対応するとともに，「観衆」としていじめをはやし立てたり面白がったりする存在や，いじめを見て見ぬふりをし，周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の存在にも注意を払う必要がある。

国基本方針で示されている発達障害を含む障害のある児童，海外から帰国した児童や外国人の児童，国際結婚の保護者を持つなど外国につながる児童，性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童，各種災害において被災した児童，原子力発電所事故により避難している児童を含め，本校は，特に配慮が必要な児童について，当該児童の特性を十分理解した上で，当該児童の保護者とともに，必要に応じて関係機関と連携を図りながら，日常的に適切な支援を組織的に行うことが，いじめ防止の観点からも求められることについても十分留意していく。

4 いじめ防止等に関する基本的考え方

本校においては、「いじめはしない・させない・許さない」の考え方を基本に、「いじめは早期発見・適切かつ迅速な対処が重要」との姿勢の下、児童一人一人が明るく、生き生きと過ごす学校を目指して、「地域とともに歩む学校」づくりを進め、いじめの問題と真摯に向き合い、家庭や地域、関係機関等とも連携を図りながら、いじめの防止等の取組を確実に推進していく。

(1) いじめの防止 ～「いじめはしない・させない・許さない」

いじめの問題をより根本的に克服していくためには、「いじめはどの子供にも、どの学校でも起こりうるものである」との認識を持って、全ての児童を対象としたいじめの未然防止に取り組むことが何よりも重要である。特に児童をいじめに向かわせることなく、心の通う対人関係を構築できる社会性のある人間としての成長を促しながら、いじめを生まない土壌を作っていくためには、教職員をはじめ関係者による一体となった継続的な取組が必要である。

いじめ問題の解決のためには、加害・被害の関係改善だけにとどまらず、周囲の「観衆」や「傍観者」の立場をとる児童への働き掛けと意識付けが何よりも重要であり、児童自身が「いじめをしない」という強い気持ちを持ち、また、一人一人がその所属する集団の中で「いじめをさせない、許さない」といった態度・姿勢を示していくことで、いじめの多くは抑止できるものと考えられる。

なお、条例では、児童生徒のいじめの禁止及び児童生徒の心構えについて、次のとおり定めている。

(いじめの禁止及び児童生徒の心構え)

第4条 児童生徒は、いじめを行ってはならない。

2 児童生徒は、自己を大切にするとともに、他者を思いやるよう努めるものとする。

このため、学校の教育活動全体を通じ、法や条例により児童生徒はいじめを行ってはならないと定められていることについて周知を図りつつ、児童の豊かな情操や道徳心、自分の存在と他人の存在を等しく認め、互いの人格を尊重し合える態度・社会性など、心の通う人間関係を構築するための素地を養うことが必要である。特に、東日本大震災による被災地である仙台市においては、復興の未来を担う児童が、命の尊さを学び、自らの存在価値を認め、自己を大切にするとともに、他者を思いやり、協力する心を育成することなどが強く求められるところである。

さらに、いじめの背景には様々な要因が考えられるが、中でもストレス等の要因に着目し、その改善を図り、ストレスに適切に対処できる力を育む観点が必要である。加えて、全ての児童が安心でき、自己有用感や自己肯定感、充実感を持つことのできる学校生活づくりも未然防止の観点から重要である。

また、これらに加え、いじめの問題への取組の重要性について保護者や地域全体に認識を広め、家庭や地域においてもいじめを見逃さず、これを許さないとの姿勢を持って、学校と一体となった取組を推進することが必要である。

いじめの防止においては、以上を踏まえ「いじめはしない・させない・許さない」の考え方を

基本として進めていく。

(2) いじめの早期発見 ～「いじめは早期発見・適切かつ迅速な対処が重要」

「いじめは早期発見，適切かつ迅速な対処が重要」との姿勢の下，教職員は，児童の保護者をはじめ，当該児童と関わる大人と連携し，児童生徒のささいな変化にも気付き，対応していくことが大切である。このため，いじめは大人の目に付きにくい時間や場所で行われたり，遊びやふざけあいを装って行われたりするなど，大人が気付きにくく判断しにくい形で行われることを認識し，ささいな兆候であっても，いじめではないかとの疑いを持って，児童が発する不安や変化を見逃さず，早い段階からの確に関わりを持ち，積極的にいじめを認知することが必要である。

また，いじめの早期発見のためには，児童や保護者が教職員に信頼し安心して相談できるよう，教職員と児童生徒及び保護者との間の常日頃からの信頼関係の醸成が重要である。本校は，定期的なアンケート調査や教育相談の実施，相談窓口の周知等により，児童や保護者がいじめについて相談しやすい体制を整えるとともに，地域，家庭と連携して児童を見守ることも必要である。

(3) いじめへの適切かつ迅速な対処

いじめがあることが確認された場合，本校は，いじめを受けた児童やいじめを知らせてきた児童の安全を最優先に確保し，当該児童を守り通すとの姿勢の下に，事実の詳細を確認した上で，いじめたとされる児童や周囲の児童に事情を確認し，適切に指導を進めるなどの対応を，いじめを受けた側と行った側の双方の児童やその保護者との間で共通理解の下に行われるよう配慮しながら，適切かつ迅速に組織で行うことが必要である。また，家庭や市教育委員会への連絡・相談や，事案に応じ関係機関との連携が必要である。

そのため，教職員は普段より，いじめを把握した場合の対処の在り方について，市教育委員会作成の教員向けの手引書や校内研修などを通じて，理解を深めておくことが必要であり，更には，学校における組織的な対応を可能とするような体制を事前に整備しておくことが大切である。

(4) 家庭や地域との連携 ～「地域とともに歩む学校」づくりの推進

社会全体で児童を見守り，健やかな成長を促すためには，学校関係者と地域，家庭との連携が必要である。特に，保護者が子供の教育について第一義的責任を負い，規範意識等を養うための指導等をより適切に行うためには，地域を含めた家庭との連携の強化が重要であり，PTAや地域の関係団体等と学校が，いじめの問題も含めた児童の現状について共通理解に立ち，連携し協働で取り組むことが必要である。

仙台市においては，現在，児童のよりよい学びのために，学校が積極的に家庭・地域と連携して豊かな教育環境の創出を目指す「地域とともに歩む学校」づくりを教育活動の基盤に据えて進めているところであり，本校としても，この理念の下，学校支援地域本部など，学校が家庭・地域と一体となって地域ぐるみで児童を育てる体制づくりを進めていく中で，いじめの防止等についても，対応を図っていくことが極めて重要である。

また，いじめの未然防止や早期発見につながる場合もあることから，児童が日頃から，異なる

年齢を含めた他の児童や大人と関わりを持つ機会として、地域における活動や行事も重要である。

(5) 関係機関や他の学校との連携

本校として、いじめに関係した児童に対して、必要な教育上の措置を講じているにもかかわらず、その指導により十分な効果を上げることが困難な場合などには、警察や法務局、相談関係専門機関や医療機関、児童の指導上の問題の解決のための学校関係機関等との適切な連携が有効であり、日頃から、本校と関係機関の担当者間での情報交換や連絡会議の開催など、情報共有体制を構築しておくことが必要である。

また、本校の児童が利用する児童館では、学校と人間関係が連続しており、いじめが発生した場合には双方で適切に対応して早期解決を図る必要があることから、適宜必要な情報共有が図られるよう、本校と児童館との間で、情報共有体制を構築しておくことも重要である。さらに本校においては、二中学区健全育成連絡協議会を中心に、木町通市民センター、木町交番などとの協力・連絡体制をとって、取組を進めていく。

このほか、児童の入学、卒業、転出入に際しても、これまで在籍した学校（市立学校以外の学校や幼稚園・保育所を含む。）と、入学・転入先の学校間において、必要な情報が円滑に引き継がれるよう特に留意することが求められる。

Ⅱ いじめの防止等のための対策の内容

1 いじめの防止等の対策のための組織の設置

(1) 仙台市立木町通小学校いじめ防止等対策委員会

本校においては、法第22条及び条例第14条に基づき、いじめの防止等に関する措置を実効的に行うため、「仙台市立木町通小学校いじめ防止等対策委員会」（以下「本校いじめ対策委員会」という。）を設置する。

本校いじめ対策委員会は、基本的に、校長、副校長、教頭、主幹教諭、教務主任、児童支援（いじめ対策担当）教諭、生徒指導担当教諭、教育相談担当教諭、不登校支援コーディネーター、特別支援教育コーディネーター、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラー、さわやか相談員等の構成により、内容・案件によっては、他の必要な教職員やスクールソーシャルワーカーなどの外部の専門家も参画させるなど、校長が実情に応じて定めるものとする。

本校いじめ対策委員会は、いじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの適切かつ迅速な対処等、学校が組織的かつ実効的にいじめの問題に取り組むに当たって中核となる役割を担うものである。その所掌事務は次の通りとする。

- | | |
|---|---------------------------------|
| ア | 学校いじめ防止基本方針に基づく取組の具体的な年間推進計画の策定 |
| イ | 本校のいじめの防止等のための対策の企画、実施又は承認 |
| ウ | いじめの相談・通報窓口 |

エ いじめの疑いに関する情報や児童（生徒）の問題行動などの情報の収集，記録，共有

オ いじめの事案が発生した場合の対処（事実関係の調査、対応や指導等の方針決定等）

カ 本校のいじめの防止等のための対策の取組結果の点検・評価

（学校いじめ防止基本方針が学校の実情に即して適切に機能しているかどうかや，学校で定めたいじめの防止等のための取組が計画どおりに進んでいるかどうかのチェック，いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証，必要に応じた計画の見直しなど，各学校のいじめの防止等の取組に係るP D C Aサイクルによる検証）

キ その他いじめの防止等に関する重要事項

（2） 仙台市立木町通小学校いじめ調査委員会

法第28条第1項に定めるいじめの重大事態が発生し，市教育委員会より，学校が主体となった調査を行うように指示があった場合には，校長は，「本校いじめ対策委員会」を母体にし，学校評議員，P T A役員，学校医などの学校以外の委員を加えるなど，公平性・中立性の確保に努めた構成により，「仙台市立木町通小学校いじめ調査委員会」を設置して調査を行う。

具体的には，あらかじめ校長が「木町通小学校いじめ調査委員会設置要項」を定め，対象事案が発生した場合には，委員を任命し，迅速に対応する。

2 いじめの防止等に関する取組

いじめの防止等に向けた取組を適切かつ有効に機能させるためには，校長がリーダーシップを発揮し，主体的かつ組織的に学校が一丸となって取り組むことが求められる。

また，いじめの防止等に向けた取組を有効に機能させる上で，学校における円滑な情報共有は極めて重要であり，そのための学校の雰囲気づくりを校長自らが率先して取り組んでいく。

本校は，特に下記に掲げる事項に留意し，具体的取組の例に掲げるような計画・取組などを踏まえつつ，併せて国基本方針に添付された「学校における『いじめ防止』『早期発見』『いじめに対する措置』のポイント」等も参考にしながら，創意工夫の上，市教育委員会等と連携して，いじめの防止や早期発見，事案対処等に当たる。

（1） いじめの防止

条例では，市立学校におけるいじめの防止及びいじめの防止等のための教職員の資質向上について，次のとおり定めている。

（市立学校におけるいじめの防止）

第12条 教育委員会及び市立学校は，児童生徒の豊かな情操と道徳心を培い，心の通う対人交流の能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ，全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならない。

2 市立学校は，当該市立学校におけるいじめを防止するため，当該市立学校に在籍する児童生

徒及びその保護者に対するいじめの防止等に関する理解を深めるための啓発その他必要な措置を講ずるものとする。

3 市立学校は、当該市立学校に在籍する特に配慮が必要な児童生徒について、当該児童生徒の保護者との連携の下、必要に応じて関係機関と連携を図りつつ、いじめの防止等のための対策を講ずるものとする。

4 市立学校の教職員は、当該市立学校の教育活動その他の活動を通じて、当該市立学校に在籍する児童生徒の自己有用感及び自己肯定感を高めるよう配慮するものとする。

5 市立学校の教職員は、当該市立学校に在籍する児童生徒に対し、体罰を加え、及び不適切な指導（児童生徒の人間性又は人格の尊厳を損ね、又は否定する言動を伴う指導をいう。）を行ってはならない。

（いじめの防止等のための教職員の資質の向上等）

第13条 市立学校は、当該市立学校の教職員に対し、いじめの防止等のための対策に関する研修の実施その他のいじめの防止等のための対策に関する資質の向上に必要な措置を講ずるものとする。

本校においては、いじめはどの子供にも起こりうるという事実を踏まえ、全ての児童を対象に、いじめに向かわせないための未然防止の取組として、道徳教育の充実はもとより、学級活動、児童会活動等の特別活動等において、児童が自主的にいじめの問題について考え、議論すること等の児童の主体的な取組を推進する。

未然防止の基本は、児童が他者への思いやりや、心の通じ合うコミュニケーション能力を育みながら、周囲の友人や教職員と信頼できる関係の中で、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できるような授業づくりや集団づくりを行っていくことである。そのため、道徳教育、防災教育、自分づくり教育など、学校教育活動を通して、児童のいじめを生まない人間関係や集団づくりを指導し、推進する。

併せて、児童の自己有用感や自己肯定感、集団の一員としての自覚や自信を育むことにより、互いを認め合える人間関係・学校風土をつくることが重要であり、教育活動において特に留意する必要がある。

このほか、児童に対するアンケート・聴き取り調査によって初めていじめの事実が把握される例も多く、いじめの被害者を助けるためには児童の協力が必要となる場合がある。このため、本校は児童に対して、傍観者とならず、学校いじめ対策委員会への報告をはじめとするいじめを止めさせるための行動をとる重要性を理解させるよう努めていく。

また、教職員全員は共通理解の下、いじめを見逃したり助長したりすることのないよう、その指導の在り方に注意を払うなど、いじめ問題への対応力の向上を図りながら、児童が元気で明るく学校生活を送ることができる学校づくりを推進していくことが必要である。加えて、特に配慮が必要な児童については、当該児童の保護者との連携の下、当該児童の特性を十分理解した上で日常的に適切な支援を組織的に行うことが、いじめの防止等のための対策を講じる上でも欠かすことのできない大切な取組である。そのためには、いじめ問題への対応力や、特に配慮が必要な

児童への正しい理解と専門性の向上に向け、教職員自身の更なる資質能力と、学校組織全体の対応力の底上げを図っていく。

なお、学校の教職員は、学校教育法第11条により「体罰」は禁止されている。子供たちに対する大人の行為が、児童に問題解決のためには暴力や暴言も許されるという間違ったメッセージを伝え、いじめを誘発する恐れもあることから、条例第12条第5項により、体罰を加え、及び不適切な指導（児童の人間性若しくは人格の尊厳を損ね、又は否定する言動の伴う指導をいう。）を行ってはならないことに特に留意しなければならない。（体罰・不適切な指導の防止に関する詳細は、市教育委員会作成の「体罰・不適切な指導防止ハンドブック」を参照する。）

（具体的な取組）

◇ いじめに向かわせないための未然防止の取組

○ 年間指導計画の策定

全ての教育活動を通して、いじめを生まない人間関係や集団づくりを推進しながら、本校の学校教育目標「心身共に健康で、向上心を持って自分を高め、たくましく生きる児童の育成」を実現するため、各教科・領域、学校行事等において、いじめの未然防止に関わる年間指導計画に策定し、計画的・継続的に取り組んでいく。

○ 温かい交流のある学級づくり

児童が自己肯定感や自己有用感を持つ学級

たてわり活動など異年齢交流活動や学級での係活動、委員会活動などといった特別活動を、児童に自治的に行わせ、一人一人の活躍の場を与えることで、自己肯定感や自己有用感を育む。

規範意識のある学級

集団に必要なルール、マナー等の存在意義や、それを守ることの重要性などについて、道徳や学級活動で取り上げたり、あらゆる教育活動の中で機会を捉えて指導したりすることにより、ルールやマナーを皆が共有できるようにするとともに、それを守ろうとする規範意識を醸成する。

本音や親和的感情の交流がある学級

授業や行事の中で、どの児童にも良い所を褒め、互いに認め合える雰囲気を用意する意図的に作り出すように努めながら、児童それぞれの多様な価値観を尊重する意識を育てる。

○ 児童が意欲的に取り組む授業づくり

わかる授業

ICTの積極的な活用や、授業にユニバーサルデザインを取り入れることにより、どの児

童においても、よく分かる授業を行う。

コミュニケーション能力を育む授業

どの教科の授業においても、交流活動を指導過程に組み込むことにより、児童の実態に即して段階的にコミュニケーション能力を育成する。

個に応じた指導

授業の中で遅れが見られたり、配慮が必要であったりする児童等への学習支援と個別支援を行うことができるよう、校内体制を整える。

○ 道徳教育の充実

特別の教科道徳を軸とし、全ての教育活動において、いのちを大切にし、人間としての生き方の自覚を促し、豊かな心を育み、多様な価値観の尊重や他者理解に向けた児童の道徳的実践力を育成する。

○ 自分づくり教育の推進

本校の特色的な取組である5学年の「弟子入り体験」や、低学年での「町たんけん」等、人との関わりを大切にしながら「学ぶこと」「働くこと」「生きること」を地域と共に学ぶ学習活動を行うことにより、児童一人一人が、社会的職業的に自立した大人になるための社会性や責任感、コミュニケーション能力等を育む。

○ 防災教育の推進

毎年6月に行う学校地域合同防災訓練において、新防災教育副読本「3・11から未来へ」を活用するとともに、ゲストティーチャーによる防災出前授業や、保護者と学ぶ親子防災教室等を行うことにより、いのちの尊さを学び、人を思いやる心や他者と協力する態度を育む。

○ 児童会活動によるいじめ防止対策の実施

年度初めに、児童会が主体となって、各学級で話し合われたいじめ防止についての取組を代表委員会で発表し合う。その中から、全校で実行可能な活動を選択し、児童の意見を取り入れたいじめ防止対策を実施できるよう支援する。

<例> あいさつ運動 全校異学年遊び 業間なかよしイベント 等

○ いじめ防止『きずな』キャンペーンにおける実践

毎年全市的に実施するいじめ防止『きずな』キャンペーンにおいて、全クラスでいじめに向かわない学級づくり、絆づくりを目指し、次のような授業を行うことで、児童が互いに認め合い、助け合おうとする心情を育てる。

- ・ いのちを大切にする授業
- ・ いじめ防止に関する授業
- ・ 仲間との協力・認め合いに関する授業
- ・ コミュニケーション力を育てる活動 等

○ 法や条例の周知

法や条例により児童はいじめを行ってはならないと定められていることの児童への周知を、いじめ防止『きずな』キャンペーンを利用し、朝会や校内放送で行う。

○ 情報モラル教育の推進

インターネット上のいじめが重大な人権侵害に当たることを児童に理解させるための取組として、年間指導計画に基づいた情報モラル教育を実施する。

○ 校内研修の充実

危機管理研修会

年度初めに市教委主催のいじめに関する研修を受講した教諭による、いじめの未然防止とその対応についての危機管理研修会を実施する。（「子どもたちをいじめから守るためのいじめ対策ハンドブック」（平成 30 年 3 月作成）を活用）

いじめ事案研修

いじめに対する実践的なスキルの向上や対応力の底上げ、同様の事案の再発防止に向けたいじめ事案研修を実施する。

児童理解研修

特に配慮を要する児童への正しい理解の促進と、そのような児童に寄り添った対応や支援のために、児童理解研修を実施する。また、スクールカウンセラーも参加し、専門的な立場から意見をもらうことにより、教職員の専門性の向上等にも資するようにする。

コンプライアンス研修

体罰や不適切指導の禁止に係る周知徹底を図るために、コンプライアンス研修を実施する。

○ 学校支援地域本部との連携

スーパーバイザーを中心として募った学校ボランティアが、学校での様々な活動をサポートする際に、いじめ未然防止に向けて、担任等への情報提供や、児童の見守り等を行う。

○ 特別支援教育コーディネーターの活用

特別支援教育コーディネーターを中心とした校内での情報共有や支援，学校間の引継ぎ，医療機関や支援機関との円滑な連携の推進を図る。

○ 児童支援教諭による取組み

- ・ 校内いじめ対策委員会や校内研修，職員会議等において，いじめの問題に教職員間の共通理解を図る。
- ・ いじめの未然防止のため，担任と常時情報交換を行い，関係機関等とも連携できるようにコーディネートする。

○ 保護者，地域等への周知

次のことを，学校だよりやプリント，保護者会等で保護者や地域に周知する。

- ・ 学校として行う，いじめ予防の取組について
- ・ いじめ等についての相談窓口について
- ・ 校内いじめ対応マニュアルについて
- ・ 保護者向けの啓発（いじめ防止への協力，法や条例に定める保護者の責務，虐待禁止等）

(2) いじめの早期発見

条例では，市立学校におけるいじめの早期発見について，次のとおり定めている。

第19条 市立学校は，当該市立学校におけるいじめを早期に発見し，適切かつ迅速に対処するため，当該市立学校に在籍する児童生徒に対するいじめに関する定期的な調査その他の必要な措置を講ずるものとする。

2 市立学校は，当該市立学校に在籍する児童生徒及びその保護者並びに当該市立学校の教職員がいじめに係る相談を行うことができる体制を整備するものとする。

いじめは大人の目に付きにくい時間や場所で行われたり，遊びやふざけあいを装って行われたりするなど，大人が気づきにくい判断しにくい形で行われることが多いことを教職員は認識し，ささいな兆候であっても，トラブルと安易に判断せず，いじめではないかとの視点を持って，早い段階からの確に関わりを持ち，いじめを隠したり軽視したりすることなく，積極的に認知することが必要である。

このため，日頃から児童（生徒）の見守りや信頼関係の構築等に努め，児童が示す変化やSOSを見逃さないようアンテナの感度を高く保つ必要がある。併せて，本校においては，市教育委員会による一斉「いじめ実態把握調査」の他，学校独自のアンケート調査や教育相談の実施等により，児童がいじめの相談がしやすい体制を整え，いじめの実態把握に取り組むものとする。

アンケート調査や個人面談において，児童が自らSOSを発信すること，及びいじめの情報を教職員に報告することは，当該児童にとって多大な勇気を要するものであることを教職員は

理解しなければならない。これを踏まえ、本校は、児童からの相談に対して教職員等が迅速に対応することを徹底する。

(具体的な取組)

◇ いじめの早期発見への取組

○ いじめに関する相談窓口の周知

いじめの相談は全教員により対応するものとするが、相談体制としては、特に次に掲げるものを基本とする。

- ・ 児童からの相談 : 担任, 同学年教諭, 養護教諭, スクールカウンセラー
- ・ 保護者等からの相談 : 担任, 教頭, 児童支援教諭, 生徒指導主任, 教務主任, 教育相談担当教諭,

校長が学校の状況を踏まえて決定し、児童、保護者等に4月のPTA総会資料として配付し、周知を図る。児童が学校生活等において悩んでいることや困っていることなどがあった時の、各関係機関の相談窓口についても、学校の窓口と共に知らせる。

また、学校だよりや学校ウェブサイト等で、地域にも周知する。

○ 教職員の意識転換 「アンテナ」から「ソナー」へ

いじめは、教職員や大人が気づきにくいところで行われ、潜在化しやすいことを認識し、教職員が児童の「サイン」や「変化」を見逃さないようにすることが重要である。

そこで本校では、受動的に待つだけの「アンテナ」ではなく、教職員自らが動いて探る「ソナー（探査機）」という意識を持って、いじめの早期発見に当たる。

また、本校が独自に作成した「いじめの早期発見のためのチェックリスト」も活用する。

○ 児童との信頼関係の構築

全教職員が児童の日常的な観察を丁寧に行い、各学級担任は、児童一人ひとりのよいところを様々な角度からみて励まし、認めることにより、児童との信頼関係を構築し、早期に担任へ相談できる環境づくりに努める。

○ 「いじめ対応マニュアル」の活用

いじめの疑いのある情報を教職員が把握した場合、その報告ルート、情報共有の手順、情報共有すべき内容（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どうした、なぜ）等、情報集約化に向けた基本的なルールを「いじめ対応マニュアル」として策定、活用することを、全教職員で共通理解する。

○ いじめアンケートの実施

いじめに関するアンケート調査（本校独自に作成、毎月実施）により、いじめの早期発見を

目指す。

アンケートの実施を通して、「いじめは人間として絶対に許されない」との雰囲気や学級全体に醸成する。また、はやしたてたり、見て見ぬふりをしたりする行為もいじめを肯定していることを理解させ、いじめの傍観者からいじめを抑止する仲裁者への転換を促す。

○ 「おはなしタイム」の設定

いじめを含む、学校生活上の不安や課題などを把握するため、児童一人ひとりと担任が面談する「おはなしタイム」（6月・11月に教育相談週間）を設定する。

児童の悩みや実態の把握をし、児童と担任との信頼関係づくりに努める。

○ 保護者との面談の設定

7月には保護者全員と、11月には希望する保護者とで、それぞれ面談を行う。

保護者との共通理解と連携を深め、児童が安心して学校生活を送ることができるように、情報の共有化を図る。また、学校への要望等は管理職に報告する。

○ 「児童意識調査」の実施

学校生活における児童の意欲や満足度、家庭生活での達成度などを把握するアンケート調査「児童意識調査」を学期毎に実施する。児童理解を深め、結果の検証・評価を行い、よりよい学校生活を過ごせるように、学校と家庭との共通理解を図る。

○ 児童館との情報交換会の実施

5～6月に、児童館と学年毎に情報交換会を実施する。

放課後の児童館における児童の様子や、その児童の学校での様子等について知ることで、いじめの早期発見や今後の指導に役立てる。

○ 地域との意見交換会の実施

学校・保護者・地域の三者によるいじめの実態や防止対策等に関する意見交換を、学校評議員会・学校関係者評価委員会に併せて実施する。情報の共有とそれぞれの立場での取組について話し合い、いじめ防止に向けて協力し合う体制を確認する。

○ 業務の軽減

いじめの早期発見や適切な対処に向け、教職員が児童としっかりと向き合う時間を確保できるよう、事務の効率化や会議の精選といった業務の軽減に向けた体制づくりを推進する。

(3) いじめへの適切かつ迅速な対処

条例では、いじめが疑われる場合の学校への情報提供や、市立学校におけるいじめへの適切かつ迅速な対処について、次のとおり定めている。

(いじめに対する措置)

第20条 児童生徒若しくはその保護者からいじめに係る相談を受けた者又はいじめを行い、若しくは受けていると思われる児童生徒を把握した者は、速やかに、当該児童生徒が在籍する学校に直接又は教育委員会を經由して情報を提供するよう努めるものとする。

2 市立学校は、前項の規定による情報の提供があったときその他当該市立学校に在籍する児童生徒がいじめを行い、又は受けていると思われるときは、速やかに、当該児童生徒に係るいじめの事実の有無の確認を行うための措置を講ずるとともに、その結果を教育委員会に報告するものとする。

3 市立学校は、当該市立学校においていじめがあったことが確認された場合には、いじめをやめさせ、及びその再発を防止するため、当該市立学校の複数の教職員によって、心理、福祉等に関する専門的な知識を有する者の協力を得つつ、いじめを受けた児童生徒又はその保護者に対する支援及びいじめを行った児童生徒に対する指導又はその保護者に対する助言を組織的かつ継続的に行うものとする。

4 市立学校は、第2項の措置又は前項の支援、指導若しくは助言に当たっては、当該いじめの事案に係る児童生徒及びその保護者との共通の理解の下に行われるよう配慮するものとする。

5 教育委員会は、第2項の規定による報告を受けたときは、必要に応じ、当該市立学校に対し必要な支援を行い、若しくは必要な措置を講ずることを指示し、又は当該報告に係る事案について自ら必要な調査を行うものとする。

(いじめを行った児童生徒に対する指導等)

第21条 市立学校は、前条第3項の規定による指導を行うに当たっては、当該児童生徒がいじめを行った要因を把握するよう努めるものとする。

2 市立学校は、前項の要因を把握したときは、必要に応じて関係機関と連携し、当該児童生徒に対する支援その他いじめの再発を防止するための措置を講ずるものとする。

よって、学校の教職員はいじめを発見し、又は相談を受けた場合には、速やかに学校いじめ対策委員会に対し、当該いじめに係る情報を報告するとともに、当該委員会を速やかに招集し、いじめの事実の有無の確認やその後の対応に係る方針等を定めるなど、組織的な対応につなげなければならない。学校の特定の教職員が、いじめに係る情報を抱え込み、学校いじめ対策委員会に報告を行わないことは、法の規定に違反し得る。また、各教職員は、学校の定めた方針等に沿って、いじめに係る情報を適切に記録しておく必要がある。

併せて、いじめの有無の確認を行うための措置や、いじめを受けた児童又はその保護者への支援、いじめを行った児童への指導又はその保護者への助言に当たっては、説明や報告の都度、意向を確認しながら対応を進めるなど、当該いじめ事案に係る児童及びその保護者との共通の理解の下に行われるよう配慮するものとする。

本校は法及び条例に基づき、市教育委員会に報告するとともに、事案の内容によっては、児童相談所や警察等の関係機関とも連携の上対処していく。

なお、本校が他の市立学校の児童生徒に係るいじめ(疑いを含む。)を認知した場合には、当該

他の市立学校と連携して対処に当たるものとする。

(7) 被害児童生徒への対応及び支援

被害児童への対応に当たっては、被害児童を守り通すという姿勢の下、保護者と連携の上、以下のような対応及び支援を講じていくことが必要である。

- 被害児童の心的な状況等を十分確認し、被害児童や情報を提供した児童を守り通すことや秘密を守ることを伝え、できる限り不安を除去した上で、いじめの事実関係を複数の教職員で正確に聴き取る。
- 被害児童にとって信頼できる人物（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携しながら、被害児童に寄り添える体制を構築し、状況に応じて、心理や福祉等の専門家、教員経験者・警察官経験者など外部専門家の協力を得ながら支援する。
- 被害児童が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、必要に応じて加害児童を別室において指導したり、状況に応じて出席停止制度を活用したりして、被害児童が落ち着いて学習できる環境を整備する。
- 被害児童が、加害児童との関係改善を望み、加害児童の内省の深まりが確認できた場合には、被害児童本人やその保護者の同意を得、加害児童本人やその保護者がその趣旨や意義を十分理解したことを確認した上で、謝罪・和解の場を設けるなどして関係修復を図る。なお、関係修復を急ぐあまり、謝罪・和解の場を設けることを優先することのないように留意する。
- 加害児童への指導や、加害児童から被害児童への謝罪が終わった後も、引き続き再発防止に向けた組織的な取組が必要である。従って、その後の見守り体制や再発防止策について、学校いじめ対策委員会で具体的に検討し、実践する。また、折りに触れ保護者等に見守りの状況等を伝えるとともに、必要な支援を行う。

(4) 加害児童に対する措置

加害児童に対しては、人格の成長を旨として、家庭環境や当該児童の特性などに教育的な配慮を行いながら、以下のような措置を講じていくことが必要である。

- いじめを行ったとされる児童から、複数の教職員で事実関係を聴き取り、いじめがあったことが確認された場合、いじめを受けた児童の意向を確認したうえで、しっかりといじめを受けた児童に謝罪を行うよう指導する。また、学校は、教職員が連携し、必要に応じて心理や福祉等の専門家、教員・警察官経験者など外部専門家の協力を得て、組織的に、いじめを止めさせ、再発防止の措置を講ずる。

- 迅速に関係保護者に連絡し、事実に対する保護者の理解や納得を得た上で、学校と保護者が連携して以後の対応を適切に行えるよう保護者の協力を求めるとともに、保護者に対して継続的な助言を行う。
- 加害児童が、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを十分理解し、自らの行為の責任を自覚するよう指導する。
- 児童の個人情報の取扱い等、プライバシーには十分に留意しながら、以後のいじめの状況に応じて、心理的な孤立感・疎外感を与えないよう一定の教育的配慮の下、特別の指導計画による指導のほか、さらに警察との連携による措置も含め、対応する。
- 加害児童への対応に当たっては、当該児童が当該いじめを行うに至った要因を把握するよう努めるとともに、加害児童自身がいじめや虐待を受けているといった要因を把握したときは、必要に応じて関係機関と連携し、当該児童に対する支援その他いじめの再発を防止するために必要な対応を行うものとする。
- 教育上必要があると認めるときは、学校教育法第11条の規定に基づき、児童生徒に対して、適切に懲戒（※）を加えることも考えられる。ただし、いじめには様々な要因があることに鑑み、懲戒を加える際には、教育的配慮に十分に留意し、いじめた児童が自らの行為を理解し、健全な人間関係を育むことができるよう成長を促す目的で行う。

※学校教育法施行規則に定める退学・停学・訓告以外で、懲戒として認められると考えられるものの例（「体罰の禁止及び生徒理解に基づく指導の徹底について（文部科学省平成25年3月13日付通知）より）

「放課後等に教室に残留させる」「授業中、教室内に起立させる」「学習課題や清掃活動を課す」「学校当番を多く割り当てる」「立ち歩きの多い児童を叱って席につかせる」「練習に遅刻した生徒を試合に出さずに見学させる」等

- なお、学校の教職員は、学校教育法第11条により「体罰」は禁止されている。子供たちに対する大人の行為が、児童に問題解決のためには暴力や暴言も許されるという間違ったメッセージを伝え、いじめを誘発する恐れもあることから、条例第12条第5項により、体罰を加え、及び不適切な指導（児童の人間性若しくは人格の尊厳を損ね、又は否定する言動の伴う指導をいう。）を行ってはならないことが規定されている。懲罰が必要と認める状況においても、決して体罰や不適切な指導によることなく、児童の規範意識や社会性の育成を図るよう、適切に懲戒を行い、粘り強く指導することが必要であることに特に留意する。

(具体的な取組)

◇ いじめへの適切かつ迅速な対処

○ マニュアル等の活用

いじめが疑われる場合には、聴き取りなどの事実確認のための調査をはじめ、その後の対応、改善への指導などについて、市教育委員会作成の

「いじめ防止マニュアル」

「子どもたちをいじめから守るためのいじめ対策ハンドブック」

等を基に、いじめに対する措置に係る事項を整理し、確実に対応する。

○ 組織的な対応

いじめを発見したり、通報を受けたりした場合には、特定の教職員のみで対応せず、学年主任、児童支援教諭、教育相談主任、教頭、校長へ報告し、本校対策委員会による情報共有のもと、学校としての組織的な対応を行う。

○ 関係児童への対応

被害児童及び加害児童に対しては、次に挙げる点に留意し、双方の保護者との連携を密に行いながら、丁寧な指導を行う。

- ・ 被害児童に対しては、必ず守り通すという姿勢を明確にして、児童の心の安定を図りながら対応することを基本とすること。
- ・ 加害児童には、いじめられた児童の苦痛を考え、理解させ、いじめが人間として行ってはいけない行為であることが自覚できるように、学年の発達段階に応じて適切に指導すること。

○ 関係諸機関との連携

いじめ事案として校内で対応する場合、市教育委員会に報告し、連携を図る。

被害者側と加害者側の双方の児童や保護者間で、共通理解を図ることが困難な場合等については、市教育委員会に連絡・相談を行い、助言や指導を得ながら適切な対処に当たるようにする。

また、必要に応じて、市教育委員会による助言や支援を得ながら、関係諸機関と連携して対処に当たる。

○ 指導記録の活用

いじめに関する指導記録を作成し、情報の共有化を図ることで、系統性のある、また一貫性のある指導を行うようにする。

指導記録は児童の卒業まで保存し、児童の進学・進級や転学に当たっての適切な引継ぎ等にも活用する。

○ 見守りプラン等の策定・実施

いじめの解消の定義を踏まえ、いじめを受けた児童への心のケアや支援内容、加害児童の様子等に係る具体的な見守りプラン、教職員の役割分担を含む対処プラン等を本校いじめ対策委員会で策定し、必要な対応、指導をしていく。

(ウ) いじめの解消について

いじめは、単に謝罪をもって安易に解消とすることはできない。いじめが「解消している」状態とは、少なくとも次の二つの要件が満たされている必要がある。ただし、これらの要件が満たされている場合であっても、必要に応じ、他の事情も勘案して判断するものとする。

1) いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネット及びSNS等を通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。いじめの被害の重大性等からさらに長期の期間が必要であると判断される場合は、この目安にかかわらず、学校の設置者又は学校いじめ対策委員会の判断により、より長期の期間を設定するものとする。本校の教職員は、相当の期間が経過するまでは、被害・加害児童生徒の様子を具体的な見守りのプランに基づき注視し、期間が経過した段階で判断を行う。行為が止んでいない場合は、改めて相当の期間を設定して状況を注視する。

2) 被害児童（生徒）が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害児童がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。被害児童本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

学校は、いじめが解消に至っていない段階では、被害児童を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保しなければならない。学校いじめ対策委員会においては、いじめが解消に至るまで被害児童の支援を継続するため、支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対処プランを策定し、確実に実行する。

上記のいじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、本校の教職員は、当該いじめの被害児童及び加害児童については、日常的に注意深く観察する必要がある。

(4) 家庭や地域との連携

(7) 家庭との連携

社会全体で児童生徒を見守り、健やかな成長を促すためには、学校関係者や地域、家庭との連携が必要である。保護者は児童生徒の教育について第一義的責任を負うものであり、その保

護する児童生徒がいじめを受けた場合には、適切に当該児童生徒をいじめから保護する責務を有している。このようなことから、いじめを許さないなどの規範意識を養うための指導を適切に行い、いじめから児童生徒を守っていくためには、家庭との連携の強化が重要である。

(具体的な取組)

◇ 家庭との連携

○ いじめ防止についての広報

学校が取り組むいじめ防止等に向けた取組について、年度初めのPTA総会や各懇談会で児童及びその保護者等に知らせ、学校の取組に理解と協力を得る機会とするとともに、学校だよりや学校ウェブサイト等を活用し、いじめ問題の重要性や、家庭と緊密に連携する重要性等についての認識を広く周知する。

○ 保護者との連携

学年・学級懇談会、個別面談、連絡帳や電話による連絡等を活用することにより、児童の情報を共有しながら、保護者との信頼関係を築くよう努める。

○ 就学前児童の保護者への対応

新入学保護者説明会等の機会を捉え、就学前児童の保護者に学校のいじめに係る状況及び対策について情報提供することにより、いじめ問題への理解を推進するとともに、入学への不安を軽減するように努める。

○ 「ネットいじめ」研修会の実施

携帯電話、スマートフォン等によるインターネット利用した、いわゆる「ネットいじめ」についての現状や問題点、注意点等に関する研修会を、児童と保護者を対象に実施する。

(1) 地域との連携

児童が、日頃からより多くの大人と関わることにより、いじめの未然防止や早期発見につながる場合もあることから、学校や地域の状況を踏まえながら、児童に対して地域の取組などへの参加を促すことも有効である。

(具体的な取組)

◇ 地域との連携

○ いじめ防止についての広報

学校いじめ基本方針やいじめ防止等の取組を学校だよりや学校ホームページ、地域における会議等で紹介し、広報・啓発を図り、学校の取組に理解と協力を求めていく。

○ 協働型学校評価との関連付け

地域へのいじめ防止に関わる取組について、協働型学校評価重点目標との関連付けを図りながら具体的に示すことにより、いじめに向かわない子供の育成を目指し、点検結果を踏まえながら更なる改善を図っていく。

○ 児童生徒による故郷復興プロジェクト

本校の復興プロジェクトにおいて、「自分たちが地域のためにできること」をテーマに、児童による地域へのボランティア活動や児童と地域の方々とが交流する活動内容等を取り入れて実施する。具体的には、毎年度の児童復興プロジェクト委員において企画・実施する。

○ 学校ボランティア等地域の人材の活用

学校支援地域本部「木の芽ねっと」、学校ボランティア防犯巡視員、木町地区民生委員児童委員協議会等、学校ボランティア等で多くの地域の人材が本校と関わっている。このような人々に地域行事や公園遊びなど地域での児童の見守りをお願いする事により、いじめの未然防止、早期発見につなげる。

(5) 関係機関や他の学校との連携

学校も含めた児童の日常生活において、いじめをなくし健全育成を図っていくためには、児童の関わる学校に関係する組織や団体等との幅広い連携・協力を進めていくことが不可欠である。

また、いじめの事案解決に当たっては、学校による対応の範囲を超える場合もあり、状況に応じて、行政機関や専門機関との速やかな連携が図れるような関係づくりに取り組むことも重要である。

特に、多くの児童生徒が放課後に利用している児童館におけるいじめを防止し、又はこれに適切かつ迅速に対処するために必要があるときは、本校に在籍する児童又は当該児童館を利用する児童に係るいじめの防止等に関し、相互に必要な情報の提供を行うものとする。

このほか、児童の入学、卒業、転出入に際しても、これまで在籍した学校（市立学校以外の学校や幼稚園・保育所を含む。）と、入学・転入先の学校間において、円滑な引継ぎが行われるよう特に留意する必要がある。

（具体的な取組）

◇ 関係機関や他の学校との連携

○ 二中学区健全育成連絡協議会との連携

学校警察連絡協議会や地域ぐるみ生活指導連絡協議会を母体とした、二中学区健全育成連絡協議会において、中学校区の小中学校、管内の警察署や交番、児童館・市民センター等と連携した情報交換を定期的に行う。

○ 小中連携による取組み

第二中学校との相互授業参観や、出前授業の実施、「いじめ防止『きずな』キャンペーン」での小中合同あいさつ運動、児童会と生徒会との交流活動等を通じて、小中学校間の連携を常に密にするよう努める。

○ 児童館との連携

木町通児童館には本校児童が多く在籍しており、学校とは違った行動や友達関係等により、児童館でのトラブルが学校でのいじめ事案に繋がったりすることがある。そのため、児童館と各学年との情報交換会を夏休み前に設定するとともに、必要に応じて随時児童のトラブル等の情報を共有するなどして、いじめ予防に努める。

○ 入学や進学、転出入における引継ぎ

学校間の児童の引継ぎは、書面や電話、直接の話し合い等により、可能な限り正確な実態把握につなげられるよう、適切に対応する。

新入学児童の本校入学に向けては、近隣の幼稚園・保育所と連携して交流学習を実施し、小学校生活の見通しを持たせる。1月後半頃には、幼・保・小連絡会を実施し、新入学児童の引継ぎを丁寧に行うことで、実態の把握に努め、学級編制等に活用する。

中学校進学時に当たっては、合唱コンクールリハーサル見学、陸上練習の直接中学校を訪問して学校生活の様子を伝え、確認し合うための小中連絡会を行う。卒業式後には、担任及び養護教諭との小中連絡会を行い、確実な引継ぎに努める。

本校から転出する児童については、転学先の学校に、当該児童に係る必要な情報が十分かつ適切に伝わるよう、引継ぎを行う。また、転入児童に関しての引継ぎを受けた場合には、当該児童が学校生活を円滑に過ごせるよう、その情報を活用し、児童の実態や家庭の事情等への理解を深めながら組織的に対応する。

○ 専門機関等との連携

いじめの事案解決にあたり、学校は市教委と連絡を取りながら対応するが、状況や必要に応じて、児童相談所、発達相談支援センター、適応指導センター、青葉区役所家庭健康課、仙台北警察署等の機関と連携し、助言や指導を受けながら適切に対応する。

Ⅲ 重大事態への対処

1 重大事態の意味

法第28条第1項において、次に掲げる場合を、いじめの重大事態としている。

- ① いじめにより当該学校に在籍する児童等の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき
- ② いじめにより当該学校に在籍する児童等が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき

「いじめにより」とは、各号に規定する児童生徒の状況に至る要因が当該児童生徒に対して行われるいじめにあることを意味する。本校は、当該重大事態に係るいじめを受けた児童の生命、心身又は財産の保護を最も優先して対処するものとする。

併せて、重大事態への対処及びその公表に当たっては、当該重大事態に係るいじめを受けた児童及びその保護者の意向に配慮しなければならないことにも留意し、市対処方針等を踏まえ、市教育委員会と連携の上、丁寧に対応するものとする。

第1号の「生命、心身又は財産に重大な被害」については、いじめを受ける児童の状況に着目して判断する。例えば、次のようなケースが想定される。

- 児童生徒が自死を企図した場合
- 身体に重大な傷害を負った場合
- 金品等に重大な被害を被った場合
- 精神性の疾患を発症した場合 など

第2号の「相当の期間」については、文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における不登校の定義を踏まえ、年間30日を目安とする。ただし、児童が一定期間、連続して欠席しているような場合には、上記目安にかかわらず、市教育委員会又は市立学校の判断により、迅速に調査に着手することが必要である。

また、児童や保護者から、いじめにより重大な被害が生じたという申立てがあったときは、その時点で学校が「いじめの結果ではない」あるいは「重大事態とはいえない」と考えたとしても、重大事態が発生したものとして報告・調査等に当たる。児童又は保護者からの申立ては、学校が把握していない極めて重要な情報である可能性があることから、調査をしないまま、いじめ重大事態ではないと断言できないことに留意する。

2 重大事態の発生と調査

重大事態が発生した場合（疑いを含む。以下同じ。）には、条例第27条に基づき別に定める「仙台市立木町通小学校いじめ重大事態対処方針」に基づき、直ちに市教育委員会に報告する。

重大事態の調査は、法第28条によれば、学校の設置者が主体となって行う場合と学校が主体となって行う場合が考えられ、国基本方針において、「学校の設置者は、その事案の調査を行う主体や、どのような調査組織とするかについて判断する」と示されていることを踏まえ、仙台市においては、対象事案に応じた調査組織の区分を市基本方針で定めている。

従って、市教育委員会の判断により、本校が主体となって調査を行う場合は、「学校いじめ対策委員会」を母体として、学校評議員、PTA役員、学校医などの学校以外の委員を加えるなど、

公平性・中立性の確保に努めた構成により、校長が調査組織である「学校いじめ調査委員会」を設置し、市基本方針等を踏まえ、適切に調査を行うものとする。また、市教育委員会が主体となって調査を行う場合には、その調査に協力するものとする。

3 調査結果の提供及び報告

本校は、「学校いじめ調査委員会」の調査結果を受けて、調査により明らかになった事実関係（いじめがいつ、誰から行われ、どのような態様であったか、学校がどのように対応したか）や再発防止策について、いじめを受けた児童やその保護者に対して、適時・適切な方法で説明を行う。

なお、これらの情報の提供にあたっては、他の児童のプライバシー保護に配慮するなど、関係者の個人情報に十分配慮し、適切に提供するものとする。ただし、確たる根拠なく個人情報保護を理由に説明を怠るようなことがあってはならない。

質問紙調査の実施により得られたアンケートについては、いじめを受けた児童又はその保護者に提供することをあらかじめ念頭におき、調査に先立ち、その旨を調査対象となる在校生や保護者に説明する等の措置が必要であることに留意する。

また、本校が調査を行う場合においては、市教育委員会に情報の提供の内容・方法・時期などについて必要な指導や助言を得る。調査結果については、市教育委員会に報告する。

IV その他の重要事項

1 学校いじめ防止基本方針の周知

策定又は変更した学校いじめ防止基本方針については、条例第11条第3項に基づき、本校に所属する全ての教職員に周知するとともに、本校に在籍する児童、その保護者、地域住民その他の関係者に周知を図るものとする。

周知に当たっては、本校のホームページへの掲載その他の方法により、保護者や地域住民が学校いじめ防止基本方針の内容を容易に確認できるような措置を講ずるとともに、児童やその保護者に対しては、策定又は変更時のほか、入学時や年度初め等の機会を捉えて、定期的に周知するものとする。

2 不断の見直し

学校いじめ防止基本方針は、いじめの防止や早期発見、事案対処などいじめの防止等全体に係る内容について、年間の推進計画も盛り込みながら策定するものであり、より実効性の高い取組の実施に向け、当該学校の実情に即して適切に機能しているかを学校いじめ防止等対策委員会を中心に点検し、必要な見直しが随時図られるようなPDCAサイクルを機能させながら、不断の見直しを行うものとする。